

朝食のみそ汁の匂いが畳敷きの部屋に立ちこめている。すがすがしい白い朝日に照らされながら、二人の幼い少女が、互いの裸体を絡ませあっていた。肌の上に指を絶え間なく這い回らせながら、相手の腹が可愛らしくきゅるきゅると鳴っているのを、梨花はめざとく聞きつける。

「おなかすいた？ 後にするですか」

くっ、と喉奥だけで啜う。

「や、あ……」

沙都子の言葉になつていないあえぎを漏らした口の端から小さくよだれを舐め取って、肌に唇を沿わせたままで、言う。

「ボクは沙都子がいればそれでおなかいっぱい」

「そ、ん、なの」

「美味しい」

やわやわとした平らな腹まで服をたくし上げ、甘く噛む。ほとんどふくらみのない胸も、くびれの無いウエストも、色気と言うよりはむしろ痛々しさを感じさせる裸だった。

「沙都子のえっち」

「ど、どっちが、ですの……」

「だって、すぐとろけそうな顔してるですよ？」
うす赤く上気した頬に、しっとりとうるんだ目、ひそめられかすかにうごめくだけのまつげ、ほころんだ唇の上へつややかに照る唾液。

「ボク、見ているだけで、おなかいっぱいです」

そう言いながら、肌の上をじらすように指を滑らせていく。そのたびにびくびくと震えるように沙都子の腰が動く。

「やつぱり、沙都子はえっちです」

冷ややかな言葉の中には親しみの笑みが込められている。

「そんなんっ、こと……」

「嘘」

首をもたげ、身体をずらす。すぐキスが出来そうなほどの距離に唇をもってくる。吐息が重なる。

「いじ、わるですわ」

「どうして欲しい？」

顔をそむけて、沙都子は逃げる。なぶるような梨花の視線、粘るような甘い問い掛け、香り立つ暖かな息吹から、逃げずにはいられない。

だが、片手で沙都子の顎がもたげられる。

「逃さないですよ。沙都子はずっとボクのそばにいるといいのです」

すぐ近くで満面の笑み。そのくせ沙都子の身体をしっかりと押さえつけている力は全力。沙都子には友人の希有なまでの両面性が薄く透けて見て取れた。無邪気にして老獪。善良にして性悪。天使にして悪魔。巫女にして魔女。

「どうして欲しいのか、口で言うといいですよ？」

ボク、優しくしたげるですよ、にぱ☆

どこか胡乱げですらある、何もかも見抜いた上での問い掛け。沙都子の口元がかすかに、何かの形に動きかけ、止まる。

「……言わない」

けれどつぶやいたのは、意固地なまでの拒絶。

「どうして？」

「言ったら、梨花に甘えてしまうから、ですわ」

沙都子は頬を熱くして答える。

「わたくしは、もう誰にも甘えない」

瞳を潤ませて、欲しがらるためではなくて、断るために少女は語った。

「ずっと誰かに甘えつばなしだった。その報いが降りないように、誰にも甘えない」

頬を赤らめ、息を上げて、太ももをもじもじとこすり合わせながら、それでも彼女は耐えている。

「でも、梨花、あなたが甘えるのなら、わたくしは受け入れるから、だから……」

最後まで、言わせなかった。

唇を重ねて、言葉を止めた。

「じゃあ、今度はボクが欲しいと言うです」

笑みを浮かべて、抑えた声で、梨花が言った。

「沙都子の全てが、欲しいです」

「っ……!?!」

一気に上気した沙都子の頬をべろりと舐めた。そして、深い深い口づけをした。熱い舌を差し入れ、

唾液でぬめる柔らかな唇が滑りそうになるのをつなぎとめる。つるつるとした真珠のような歯の上をやさしく触れていくと、次第に互いの息が熱く上がっていく。

吐息の温度、上がっていく身体の熱。たくし上げられた服の衣擦れ。貧弱な胸の突起に塗りつけられた唾液が糸を引き、ぬめる。柔く指先を震わせて、かすかにたちあがり始めた沙都子の桃色をもてあそぶ。

「ひゃ、う……」

沙都子は声を上げかけて、それでも飲み込む。いたずらっぽい表情の梨花に、少し腹立たしげに口元をへの字に曲げてみせる。

「ずい、ぶん……よゆう、ですのね」

「沙都子は余裕なさそうです。いい子いい子」

言いながら頭ではなく、胸の突起をなぞる。

「やあつ……!」

今度こそ声を出した。うす紅く色づいたそこをなぞるごとに艶めかしさを増す声を、うっとりしながら

らに煽る。梨花の吐息もまた情熱を帯びて、じつとりと甘く、呼吸も吸気も燃えたぎるように激しくなっている。

ぶつくりと充血した肉豆を唇ではみながら、右手中指をそろそろと入り口へ添えた。

それだけで沙都子の花弁はぎゅっと収縮した。期待するその浅ましい動きに、梨花の笑みが深くなる。

そのまま何の遠慮も無しにずふりと貫く。十分に濡れそぼっていたそこは、梨花の細い指先を抵抗もなく受け入れた。

指を埋めたまま、舌先の動きを加速する。左手で恥丘の皮膚を上を滑らせて、より一層紅を増した突起の先端を露わにする。吸い付けば吸い付くほどに彼女の秘所は梨花の指先をひくひくと締めつけた。掻き出すように強く、動かす。何も考えられないぐらいに、激しく沙都子の蜜壺をかき回した。

耳元で起こる空気と肉と液体の混ざり合う音と、自分の動悸と呼吸音のせいで、沙都子の声まで聞こえない。ただ何か必死な運動をしているというだけ

ら梨花は耳をそばだてて聞いた。

「かわいいです。レナじゃなくてもお持ち帰り☆なのです」

「もう、お持ち帰ってますわ」

「まだ、しゃべれるですね。元気な子はいいい子」

ゆつくり肌の上に唇を滑らせる。腰がはねる。嬌声が高くなる。

そこから先は、言葉のいらぬ世界だった。

唇が胸からゆつくりと下がっていき、腰骨の周りを少しずつ溶かしはじめた。熱くとろけていく肌に吸い付けられるようにして、つるりとした下腹部へ梨花は顔を埋めていく。濃くなっていく沙都子の匂いに思わず顔がほころんだ。うるんだ花びらへ向けて舌先を滑らせる。

ほころびた花弁に強く弱く刺激を加えるごとに、歌うように沙都子は鳴く。息を荒げ、肩を上下させてただただ必死になって梨花の愛撫を受け入れる。時折響く水音もまた、互いの欲情をかき立ててき

で、そこには何もなかった。

やがて、沙都子の腰がひときわ強く跳ねて、弛緩した。梨花はゆつくりと動きを止めた。

指を抜いて、沙都子の上に覆い被さる。

とろんとした目で、彼女はこちらを見ていた。指先一本に至るまで、とろけたようになって、半ば夢の中に至っていた。

梨花は小さく彼女の頬をつまんで言った。

「学校、遅刻するですよ」

「ん……」

むずかる赤子のような声を出しながらも、沙都子は身を起こしかけ、そのまま重力に負けて寝転がった。

「まあ、もう少し休むといいですよ、にば☆」

非常にすっきりした顔で、梨花は立ち上がって、洗面所へ向かう。手を丁寧に石けんで洗って、タオルで拭いた。

てきぱきと朝食を平らげている間、沙都子は身じろぎもせずに横たわっていた。

「ごちそうさまを言い終わって、食べ終わった食器をシンクに浸ける。」

「さすがに今日はお休みするですか？」

梨花の呼びかけに、沙都子はようやく反応した。

「こ、こんなことに負けないんですよ！」

がばつと起きあがる。

まだ足腰はふらついている。それでも全速力で身支度をした。

「おー、頑張ってるです。腰くだけなのに」

「だっ、誰が腰くだけですよ！ ちょっと休んだら

平気になっ……」

言いかけた沙都子の腰をぼんと梨花がたたいた。

「ひやうっ！」

へなへなと畳に座り込んだ。

「んー、もう少し休んだ方がよさそう」

にやにやしながら梨花は言った。

「そっ、そんなこと……」

微かにうるんだ目をして、沙都子が反論する。弱々しかった。

「次はもう少し優しくしたげる、です」

満面の笑みを浮かべて、梨花は言った。